

ストーリーのある 観光、名産に期待

公益財団法人 日本証券経済研究所 理事長

増井喜一郎さん

Kiichirou Masui



金融資本市場を専門研究

日本証券経済研究所は、金融資本市場に関するわが国の代表的な専門研究機関。制度の在り方や諸外国の動きなどの調査研究、金融・証券のスペシャリストを招いての講演会、証券図書館、高橋亀吉文庫の運営などが主な業務だ。

「静岡市は、それなりに活気も賑わいもある。いい形で発展していますね」と受け止めている。ただ、今後は「少子高齢化やグロ

静岡市にゆかりがあり、東京を拠点に内外で活躍する皆様に、東京から見た静岡市の良さと可能性、まちづくりの方向について、ご提案いただきます。

「集約」し、まちづくり

「バリゼーションで地場産業にしても相当な努力が必要になると思います。視野を広げ、情報に敏感になる、競争心というものがツミたいな、そういったものがないと、東京に出てきたり、他の地域と競争し存在感を示すのは難しい感じがします」と話す。

若い頃、横浜市に向向、自治体の現場を知る数少ない旧大蔵官僚でもある。「人口

経歴

静岡市葵区生まれ。県立静岡高校卒業。京都大学法学部卒業。1973年、大蔵省入省、東海財務局長、大臣官房審議官、近畿財務局長、金融庁総務企画局長、日本証券業協会副会長などを経て、2014年、公益財団法人日本証券経済研究所理事長に就任。64歳。

宮澤内閣の加藤紘一、河野洋平官房長官の秘書官を務めた。祖父の増井慶太郎氏は旧静岡商工会議所の第10代会頭。

<http://www.jsri.or.jp/>

減少と高齢化、つまりこれからの人口構成や財源を考えると、やはり老人が生活しやすいまち、子育てのための保育所も含め一つのまち、コミュニティをつくっていく。捨てるものは捨て、ある程度集中、集約してまちづくりするしかないのでは。ほったらかしておくとか虫食いの空き家が増え活力の阻害要因になる。また、人口減など負の部分の補うためには国内での取り合いではなく成長している海外の力をうまく利用するしかないと思います」。

もう一つの指摘は、観光や名産へのストーリーづくりだ。「個別のイベントとか、それはそれでいいんですけども、証券界にいると、例えば会社が新しく増資するときにエグゼクティブストーリーというのを考えます。増資して一発で、はいおしまいじゃなくて、これこれ、こうやって業績を上げますってことを株主に訴える。そういうストーリーですね」。

「徳川家康だったら関連する浜松などを結び付けてストーリーをつくり、ぐるっと回つてもらうとか。お茶だつてああ、このお茶は家康公も飲んだんだな、つて思ってもらおうストーリーがあつたりすると注目度もアップする。取り組んでられるのかもしれないが、ストーリーをつくることによって、その先に行ってみようかなという思いも出てくるのではないしょうか」と期待を寄せる。

(文：長田義明、写真：日本証券経済研究所)